

ふかぐつ 深沓 フミダワラ

わら沓は、長靴に似た「深沓」もあり、豪雪地帯に住む人がよく利用しました。フミダワラは、雪をふみ固めて道をつくるときに使います。

あたたかい長ぐつ 深沓

わら沓の中に雪が入ると、中でとけて足を冷やし、歩きにくくします。すねまでの高さを持つ深沓は、雪深い地方に、なくてはならない大切なはきものでした。つくりは、ぞうりやわらじと比較すると複雑で、製作には、より高度な技術を要しました。美しくじょうぶに編まれた深沓は、2、3年使われるものもありました。



「シチベイサンペイ」とよばれたわら沓。前ページで解説した「はばき」のように、すねに密着させるための長い縄がついています。前方は、しめ具合を調整できるようにしています。底にスギの板を入れたり、すき間にハカマ (アペーク) を詰めたりすることもありました。

てぶくろ わらの手袋

手袋は、毛糸で編んだものや、革製のものが主流と思われがちですが、わらでも作られていました。これは親指と、ほかの指を入れるところに分けて編まれています。



しつかりした底がつけられ、甲の部分は、あつく編まれています。高さはひざ下まであり、上部は布をぬいつけて、ほどけにくくしています。



深沓作り

深沓を作る人は、今、激減しています。作り方が伝承されていくことが望されます。



わら細工は、基本的に底の部分から作っていきます。深沓も同様で、各部分ごとに編み方を変えていくなど、根気のいる作業が続きます。

フミダワラ

豪雪地帯では、一晩におとなの腰ぐらいまで雪が降ることがあります。フミダワラは、そうした大雪が降ったあとに、雪をふみ固めて、雪の上に道をつくるためにはく、円筒型の大きなわら沓です。雪をふんだあと、引き上げるための縄がついています。



みんなで 雪をふみかためて 道づくり



深い地方では、前晩に大雪が降った翌朝、子どもたちもフミダワラなどを使って、雪ふみを伝うことがよくありました。



『風俗画報』(明治時代)。

ぞうり作り体験

神奈川県の「川崎市立日本民家園」には、たくさんの古民家が移築、復元されています。園では、「民具製作技術保存会」のわら細工グループが活動しています。今では、わら製品を作る人が少なくなりました。グループ員たちは、日本のすぐれた手仕事がとだえないように、技術を学び、次世代へと伝えていくために、毎週のように園に集まり、わらを材料とした、さまざまな道具を公開製作してい

1 ぞうり作りに必要な部分(ハカマ)を、手で取りのぞく

各参加者は、グループの人たちに教わりながら、ひとり1足ずつぞうりを作ります。まず、ぞうり作りに必要なわらを分けてもらうと、「わらすり」をします。これは、「ハカマ」とよばれる、わらの不要な葉を取りのぞく作業です。穂先の方を片方の手に持ち、もう片方の手の指先を曲げて、ひっかくようにするとよく取れます。

ます。こうした活動の一環として、一般的の希望者を集めた「ぞうり作り体験」が行われました。わらから、どのようにしてぞうりができていくのでしょうか。

材料

- ・わら 約 80 ~ 100 本 (2 にぎり)
- ・布 (木綿) 古いゆかたなどの端切れ
- ・糸 30cm ていど
- ・はさみ ひとつ



2 霧吹きでわらをしめながら、わら打ちをする

ハカマを取りのぞいたわらは、「すぐりわら」といいます。これをたたく「わら打ち」に入る前に、霧吹きを使って全体をしめさせておきます。水分をあたえると、わらはやわらかくなり、作業がしやすくなるのです。しめさせたわらは、わら打ち台にのせて、「ヨコヅチ」とよばれるわら打ち用の棒で、はじからはじまで、均等にたたいていきます。



わらをたたくと、繊維がほぐれてやわらかくなり、細工がしやすくなります。また、引っぱりに強くなり、切れにくくなります。

3 ぞうり編みに入る前にも、わらを霧吹きでしめさせておく

わら打ちが終わったら、霧吹きを使って、またしめらせます。この日は晴天なので、わらはすぐかわきます。このあとの作業でも、わらがかわいたら適度にしめさせて、手仕事をやりやすくしました。



これを使って
ぞうり編みをするんだ!



この日用意されたわら打ちの道具
たたく道具は、専用に作られた木の棒です。金づち型の木づちを使
うところもあります。台も、石など
を使うところがあります。